

# 図書館通信 —76—

1986. 7

## 着任にあたって

附属図書館事務部長 齋藤現太郎

酒井前部長の後任として4月、この駿河湾を望むすばらしい環境にめぐまれた図書館に着任以来2カ月余、まだ学内事情や図書館の状況等勉強中で、しかし、そのうち徐々ととか、ゆっくりなどのんびりしたことはいつていられない。図書館をとり巻く情勢は変化しつつ大きな曲り角に差しかかっている。最近の学問・研究の多様化、学際化、それに伴う爆発的な情報量の急増、一方では行政改革による予算の落ち込みから来る資料費（図書・雑誌等購入費）不足、この狭間にあつて図書館はいかに頑張っても、従来の手法では多様化しつつある利用者のニーズに応えることは困難になって来た。これは全国共通の問題であり、これらを踏まえて、ご承知のように昭和55年1月、学術審議会から文部大臣に答申された「今後における学術情報システムのあり方」に基づき、東京大学に「文献情報センター」を置き、以来6年、調査、研究、システム開発、構築、試行と進められて来たが、今年4月、これが全国共同利用機関「学術情報センター」として、構想の段階から実施へとスタートを切った。これと並行して、各国立大学の図書館に、それに対応する基盤整備として図書館事務電算化が進められて来た。

一図書館で、その大学の教育と研究のために求められる情報を、すべて賄うことは困難になり、必然的に、大学の枠を越えた資源共有、共同利用ということが強く打ち出されて来た。利用者が必要とする情報を正確に、且つ迅速に提供するという図書館サービスの基本のためにも、“学術情報システム”の一つの柱である図書・雑誌の所在目録情報は、その完成が待たれる。しかし、それは到達するまでに、幾多の険しい道のりがあることと思う。

本学図書館においてもこれらの状況を踏まえ、図書館事務電算化問題については、すでに昭

和58年4月、図書館委員会のもとに「図書館業務電算化委員会」を設置、検討が進められて来た。今年度、東海地区国立大学図書館として最後に、本学他2大学（浜松医大、愛知教育大）に電算機システム導入の予算が認められた。直ちに専門教官、図書館員合同の機種選定委員会が設けられ、検討が重ねられている。この号がお目にふれる頃には機種が決定されていることと思う。そして62年4月から一部稼動（閲覧関係、貸出返却業務）あとは順次計画に従って進めて行く予定である。先の長い話で、暫くは生みのための苦しみが続くにしても、いづれはくぐり抜けなければならないものと思う。幸いスタッフにも恵まれ、より良いサービスの向上を目指して行きたいと考えている。

この電算化の他にも図書館は当面する問題を幾つも抱えている。紙に印刷されたものに代る情報媒体として登場してきたニューメディアへの対応もその一つである。すでに医学、体育、美術、音楽、語学等の学部を持つ大学の図書館では大量のテープ、ビデオ、コンパクトディスク等が受入れられている。又、新しいものばかりではなく、例の劣化紙（酸性紙）問題も、毎日目は目立たないが、大きな、頭の痛い問題である。先人達が残してくれた文化遺産を後世に伝えることは大事な我々達の義務である。このことは国会図書館が中心となって対応策が検討されているが、早く手を打たなければと結果が待たれる。

その他続々と問題が集積されている現在、いくら優秀なスタッフが揃っているにしても、限られた数で、多様化する利用者の要望に速やかに応えて行くためには、思い切った省力化を検討する時期に来ていると思う。利用者各位のご指導とご理解をいただきたい。

# 蔵書印「駿府学校」をめぐる

花井 信

## 【一】

本学図書館蔵書のなかに、「昌平坂学問所」「駿府学校」という印記のある和綴本がある。由緒ある蔵書印・蔵書票の故事来歴をたどることは愛書家のひそやかな楽しみであるのみならず、学問史の研究にとっても重要な意味をもってくる場合が少なくない。昌平坂学問所旧蔵書の洋書のなかには、往時禁書扱いであった社会科学書も多く、民間へ洋書が流れるのを防ぎながら、しかし欧米の動向を幕府派知識人が逸早く独占して研究しようとしていたことを示している。

蔵書印の歴史をたどること自体、一つの学問的研究の地歩をしめており、書誌学的研究の重要な分野であるが、もとより、わたしはその分野に不案内なので、ここではわずかに「昌平坂学問所」「駿府学校」の蔵書印が「静岡師範学校」の印記とともに残されていることから、静岡県学校史の一齣をとり出してみるにすぎない。

## 【二】

「昌平坂学問所」の黒印のある\*『佩文韻府』（ハイブンインブ）図1は、清代の全444巻（本館蔵本は106巻）から成る、語の末字の韻によって熟語を配列し作詩の便に供した書物であり、復刻本の序によれば、「佩文韻府为我国規模最大之韻典」とある。

ここで、昌平坂学問所旧蔵書印記についての研究に基づいて（\*『内閣文庫蔵書印譜』に詳しい）、「昌平坂学問所」の印記に二種類あることにふれておこう。その一つの朱印は昌平坂学問所蔵書のなかでも特に貴重な書籍に押され、一般学生の閲覧は禁じられていたといわれる。この点本館のは黒印であり、そしてその書名カードには、注意深く「昌平坂学問所（黒印）」と明記してある。ライブラリアンの見識を示しえており、書誌学上の正確さを発揮している。

つぎに「駿府学校」印記のある\*『淵鑑類函』（エンカンライカン）図2は、全450巻（本館蔵本も同じ）の清代の百科事典であり、故事成語を集めて注釈を施したものである。

## 【三】

徳川家の静岡移封とともに幕府直轄の開成所（蕃書調所）、昌平坂学問所、箱館奉行所などの教授スタッフ、書籍類なども移され、それが駿府学校（あるいは静岡学問所とも）・沼津兵学校の陣容

を成した。幕府中枢に位した俊才が、一時静岡と沼津に集結し、幕末文化・学術の最高レベルが当地で教授されたといえそうだ。駿府学校の中村正直、津田真道、加藤弘之、外山正一らは、兵学校の西周、赤松大三郎などととも、数年にして新政府に呼び戻されて上京するが、薩長の武弁たちは、旧幕臣の知的エリート集団の力を借りなければ、新国家の文化構想をうちたてるには不安だったのである。まことに大久保利謙氏が言うように、政治的には薩長派、文化的には幕府側に分があり、新政府は旧幕の文化的業績を摂取・利用して近代化を計ったといえそうだ（大久保利謙著『佐幕派論議』1986年刊）。

静岡学問所は明治5年（1872）「学制」頒布にかわって廃止され、備品・蔵書などは静岡県へ引渡されることとなり、明治8年静岡師範学校が学問所旧校舎を利用して開設されるにともない、それら蔵書は師範学校に引継がれた。その時代の目録として\*『貴重洋書目録』\*『貴重和漢書目録』が残されている。そして、大正14年（1925）県立図書館英文庫の開館にあたって、これら学問所旧蔵書は移管され、今日に至っているのである。

## 【四】

慶応4年（1868）徳川宗家の相続人と定められた田安亀之助が、徳川家達（いえさと）となって府中藩主に命ぜられて駿府に入ったのは8月15日のことであった。齢わずかに6歳であり、学問所設立とともに、幼年学校に通ったという。藩校が士分以上の身分の子弟に開かれるのが本来であったのに対して、学問所は「身分ノ貴賤ニ限ラ

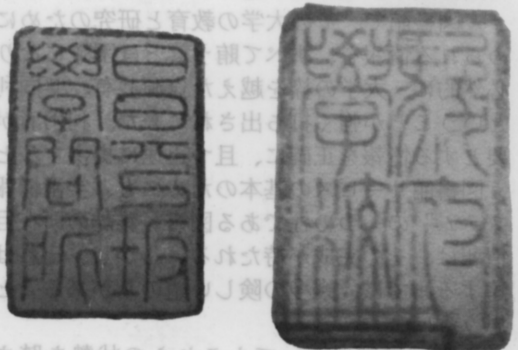


図1

図2

ス、「志アル輩」に入学を許したところに特色があり、いわば近代的ともみられる様相を呈していたが、その特色の起源は明新館に溯ることができよう。

明新館というのは安政5年(1858)幕府が直轄地たる駿府在住の幕臣子弟の教育機関として設けたものである。昌平坂学問所の分校という位置にあって、はじめ学問所とよばれたようだが、文久元年(1861)に明新館と改められた。その頃から身分にかかわらず町人たちの入学あるいは聴講を許したという。この明新館をも、人によっては駿府学問所とよぶ場合があるが、10年間つづいて慶応4年2月廃校を余儀なくされるに至った。明新館の旧蔵書の一部は清水小学校の校長室に現在保管されている。

明新館廃校後半年経った9月8日、すなわち明治と改元され、一世一元号制が定められたのと同じ日、「学問所」開設の布令が出され、国・漢・洋の三学科を教授する旨示された。しかし、10月12日の布令は15日仮開校を告知したもののそれは「漢学修様相願者ハ」と漢学を先行させ、「国学洋学之儀モ……追而御開相成候」と他の二学科の開設が遅れることも表明していた。洋学については「今般府中学問所ニ於テ英吉利、仏朗西、和蘭、独逸四ヶ国之学問来十五日ヨリ」と、11月5日の布告が伝えている。

\*『日本教育史資料』(一)に記されている一連の動きをたどれば上のとおりになるが、ここで関心を払いたいのは学校の名称であり、布令中には初め「学問所」ついで「府中学問所」となっていることから、先学は駿府学問所、府中学問所、あるいは明治2年に府中藩が静岡藩と改められたことから(この改称には学問所頭向山黄村の意見が与ったといわれる)、静岡学問所ともよんできた。『日本教育史資料』は、校名について「単二学問所ト称シ」と書いている。

そうすると印記「駿府学校」あるいは葵文庫内江戸幕府旧蔵書中にある印記「静岡学校」との関係はどうなるのだろうか。それを探るための手懸りを求めてみれば、林又三郎初代学問所頭が任せられたのは『日本教育史資料』に明記はないが、\*『明治初期静岡県史料』巻1にある、明治元年10月30日「学問所頭ヲ置」のことで判断されようが、つづく11月8日「学校ノ職ヲ定ム」として「漢洋一等教授」などを記載しているのは、学問所をも「学校」と公的に呼称することが、この時点から始まったことを示している。そして明治4年の「職制」は「学校一等教授」と明記するに至っている。

そこで推理をすれば、明治3年2月に「学校構

内へ寄宿所ヲ建設シ」ともあるように、「駿府学校」は「学問所」を含む総括的な名辞であったのではあるまいか。ただしこの推論は\*『静岡県教育史』と正反対の説になる。

要するに、「学問所」という蔵書印記のない一点から覗いてみれば(ただわたくしは葵文庫の蔵書印を自ら調べたわけではなく、石田德行氏の紹介から判断しているのにすぎないのだが)、学問所を内を含む管理機構上の総括的な名辞は「駿府学校」「静岡学校」となるのであって、それは「職制」中の公的な名辞とも一致する、とみるのである。そして「学校」と称するのは仮開校1カ月後、洋学開学時あたりからと、ひとまず推察している。(この文章を書くにあたって、石田德行氏の\*『葵』No.12、ならびに\*『地方史静岡』No.5の論考を参考にさせていただいたが、かけ足でまとめた拙稿の誤りは、追って正されよう。)(教育学部・教育史)

(\*印は本館所蔵を示す)

## かるがも雑記

開架閲覧室西側テラスで、かるがものひなが育ちました。館員も近づかないようにソツとしてやっただけで、克明なメモはありませんが、みかけた人の話を総合すると次のとおりです。五月上旬テラスの小さな植込みの草の間に抱卵中のかるがも発見、卵の数11個(14日確認)。6月2日、人が近づいても親鳥が離れなかったのは既に孵っていたのかも。その後、1個の残り卵と愛らしいひな鳥8羽を見た者あり。6月11日、テラスの下の地面にひな鳥1羽と親鳥を発見した教職員が、テラスに仮の水場を与えてやる一ただし、その翌朝確認できたひな鳥は6羽だけでした。しかし仮にも5階の高さから、飛べないひな鳥をどうやって下におろしたのやら。17日、既にもぬけのからとなったあたりを観察すると、テラスの囲みには鳥なら通れる細いすき間があり、ま下には三階の張り出しと櫛の枝葉が見え、さらには地面にクッション代りの木の葉が重ねてあったそうですから、そこまで予定して産卵の場を選んだようにさえ思え、生きものの自然の智慧の深さにただ驚くばかりです。

ところで、最寄りの池といっても700m以内には見当たりません。どこの池まで、どのように“おひっこし”をしたやら誰もみた人はいようです。

## 新人職員奮戦記

川崎 雅史

私は今春本学附属図書館に就職した一男性職員であります。新採職員といっても、私の場合、数年前まで静大の学生だったので、図書館の雰囲気にもすぐに馴染むことができました。しかし、図書館という同じ建物に出入りするにしても、学生の頃と今とはやはり大きな違いがあります。そこで今回は、利用者・職員双方の立場から、図書館の貸出業務について雑感めいたものを述べさせていただきます。

静大在学中の四年間、私は人並みに勉学に励んだつもりではありますが、図書館の利用という点に関しては、あまり熱心な方ではありませんでした。そんな私でも試験の前には図書館に足を運び、必要な本を何冊か借り出したものですが、それらのほとんどは開架図書でした。閉架図書もごくたまに借り出しはしたものの、その手続きはかなり面倒なものに思われました。周知のように、閉架図書を借り出すためには目録を引かなければなりません。本学附属図書館の目録は、訓令式のローマ字によって表記された書名なり著書名なりに基づいてカードがアルファベット順に排列されています。ところが、当時の私は、訓令式のローマ字とヘボン式のそれ、更には英語のスペルが頭の中でごちゃ混ぜになっていたため、「富士山」(訓令式では Huzisan) を Fujisan から、また、「スポーツ」(訓令式では Supotu) を Sport から引いたりして、徒に時間を空費していたものでした。検索に手間取るのは、己れの無知が原因となっていること故仕方がないとしても、うんざりさせられたのは、貸出票を職員に渡してから本を受け取るまでの待ち時間です。「待つ身は辛い」とはよく言ったもので、何をするということなく、カウンターの辺りをうろうろしながら過ごす時間はたいそう長く感じられました。そうこうするうちに職員が書庫から現れると、請求した本を受け取るべくカウンターに向かうわけですが、時として職員は手ぶらで戻って来ることがあります。彼はカウンターの内側にある目録のようなものを引き始め、その間私は更に待たされることになります。そして挙句の果てに、請求した本が貸出中であることを告げられた時には、図書館に無駄足を運んだような気になったものでした。

閉架図書の貸出業務に対してこのような印象を抱いていた私が図書館に就職して、今では待たさ

れる側ではなく、待たせる側の役回りを演ずることになりました。そこで今度は、利用者を待たせている間に我々職員がしていることをごく簡単に紹介してみたいと思います。

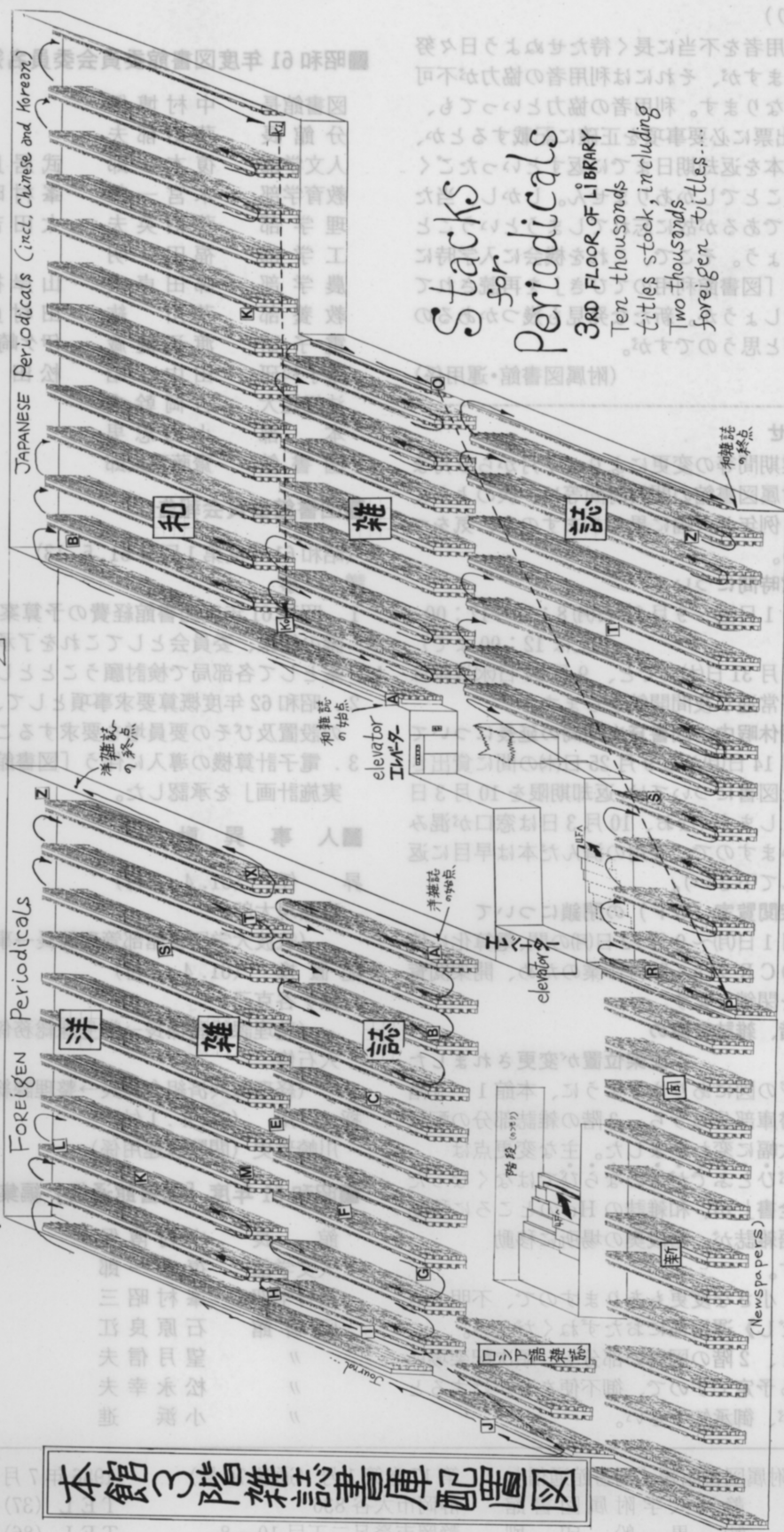
さて、利用者から貸出票を受け取ると、まず必要事項が記載されているかどうかを確認します。ベテランの職員ともなると、この時点で請求された本の配架位置はもとより、その大きさや色までもたちどころに頭に浮かぶのだそうですが、私のような新米の職員にとっては、請求記号だけが頼みの綱となります。この命綱とも言える請求記号を頼りに私は書庫に駆け下り、目的の書架へと向かいます。その書架の定位置に本があれば問題ないのですが、ないとなると少々面倒なことになります。利用者による請求記号の誤記、また、(これはめったにないことですが)職員による配架ミス等を考慮して、定位置の周囲に目を配り、それでも見つからない場合には、カウンターのあるフロアに戻って、教官貸出のファイルを引くこととなります。この段階で、請求された本が貸出中であることが分かると、その旨を利用者に告げ、また必要な場合には、その本を借り出している教官に対して利用者への閲覧・貸出を要請します。しかし、教官貸出のファイルにも当該の本が見当たらないとなると、多分学生が借り出しているであろうと考えるわけですが、念のために目録を引いてみると、カードの左上に「開架」の二文字が記載されているのを見つけることがあります。そんな時、私は利用者に、今まで探し回っていた本が書庫にではなく、開架閲覧室にあることを、頬をひきつらせながらも穏やかな口調で告げるではありません。

「読者の時間を節約せよ」(Save the time of reader)。これはインドの図書館学者ランガナータン (Ranganathan, S. R 1892~1972) が 1931 年に発表した「図書館学の五法則」(The Five Laws of Library Science) のなかの第四法則であります。本学附属図書館にも近々電算機が導入されますが、それが本格的に稼働するようになれば、貸出及び返却の手続きは大幅に簡素化されることになるでしょう。しかしながら、図書館の蔵書を閉架方式と開架方式の二本立てで運用してゆく以上、利用者が閉架図書を借り出す際に強いられる待ち時間を「無」にすることは不可能です。我々図書

雑誌の配架場所がわかりました

二五例 本2 食堂

本館3階雑誌書庫配置図



Stacks for Periodicals

3RD FLOOR OF LIBRARY  
Ten thousands titles stock, including  
Two thousands foreign titles...

正面玄関1側 旧館部分 (5階建のビル) 新館部分 (7階建のビル)

(Newspapers)

和雑誌の終点

雑誌の終点

和雑誌の始点

エレベーター

エレベーター

階段 (のりり)

入口階段

入口階段

(※ 4 頁より)

館職員は利用者を不当に長く待たせぬよう日々努力しておりますが、それには利用者の協力が不可欠なものとなります。利用者の協力といっても、それは、貸出票に必要な事項を正確に記載するとか、借り出した本を返却期日までに返すといったごく当たり前のことでしかありません。しかし、当たり前のことであるが故に忘れてしまうということもあるでしょう。そこで、これを機会に入学時に配布された「図書館利用のてびき」を再読されてはいかがでしょうか。新たな発見も幾つかあるのではないかと思います。

(附属図書館・運用係)

### ◆お知らせ

夏期休業期間等の変更により、7月から9月までの間の附属図書館の開館時間等は、次のようになります。例年と大幅に異なりますので、気をつけて下さい。

#### (1) 開館時間について

◎ 8月1日(金)～9月22日(月) 8:30～17:00

(土は 12:00 まで)

※ 7月31日(木)までと、9月24日(水)以降は平常通り夜間開館をします。

#### (2) 夏期休暇中の図書貸出期間の延長について

◎ 7月14日(月)から9月25日(木)の間に貸出された図書については、返却期限を10月3日(金)とします(なお、10月3日は窓口が混みますので、使用の済んだ本は早目に返却して下さい)。

#### (3) 開架閲覧室(5F)の閉鎖について

◎ 9月1日(月)～9月22日(月)の間、電算化に伴うOCRラベル貼付作業のため、開架閲覧室を閉鎖します。

#### 本館3階、雑誌書庫の

配架位置が変更されました

前ページの図にありますように、本館1～3階をしめる書庫部分のうち、3階の雑誌部分の配架位置が、大幅に変わりました。主な変更点は

- ①和雑誌がひとふでがきのならびではなくなった
  - ②「法令全書」が、和雑誌のHoのところへ移動
  - ③ロシア語雑誌が、階段奥の場所に移動
- の3点です。

その他、小さな変更もありますので、不明の点は《どしどし》運用係におたずねください。

また、1、2階の図書の部分も、順次配架場所を変更する予定ですので、御不便をおかけすると思いますが、御承知下さい。

### ■昭和61年度図書館委員会委員名簿

図書館長	中村博保	
分館長	藤田郁夫	
人文学部	復本一郎	武居良明
教育学部	木宮一邦	峯村昭三
理学部	菅沼英夫	太田吉彦
工学部	福田明	
農学部	邨田卓夫	山岸祥恭
教養部	荒川紘	田村貞雄
電子研	渡辺健蔵	伊ヶ崎泰宏
電子科研	田中昭	松田孝
法経短大	吉岡幹夫	
本部	小山忠男	
図書館	齋藤現太郎	

### ■図書館委員会報告

(昭和61年度第1回S 61. 5. 13)

#### 議 事

1. 昭和61年度図書館経費の予算案について審議の結果、委員会としてこれを了承し、委員会案として各部局で検討願うこととした。
2. 昭和62年度概算要求事項として、学術情報系の設置及びその要員増を要求することとした。
3. 電子計算機の導入に伴う「図書館業務電算化実施計画」を承認した。

### ■人事異動

昇 任 (61. 4. 1付)

齋藤現太郎

(筑波大学図書館部管理課長→事務部長)

配置換 (61. 4. 1付)

篠ヶ谷克己

(整理課総務係長→学生課総務係長)

大石修二

(経理課共済組合係長→整理課総務係長)

採 用 (61. 4. 1付)

川崎雅史(閲覧課運用係)

### ■昭和61年度「図書館通信」編集委員

館 長	中村博保
人文学部	復本一郎
教育学部	峯村昭三
図書館	石原良江
〃	望月信夫
〃	松永幸夫
〃	小浜進